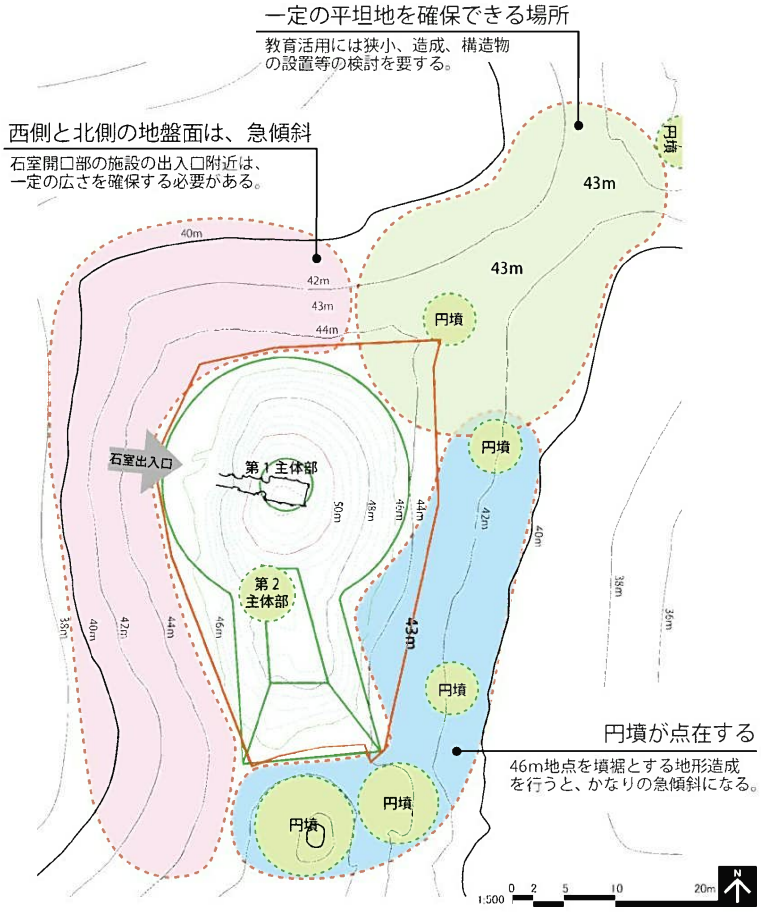
### ウ）周辺の地形条件と課題

**■園地の確保**

墳丘は５基の円墳と急傾斜な地形によって囲われている。

活用への対応をするために一定の平坦地の確保を考えると、円墳が点在する東側や南側は遺跡の保存面から適していない。また急勾配な西側から北側にかけての斜面は不特定多数の来訪者を迎えるには安全性の確保の面から適していないと考えられる。

平坦な地形は墳丘北東側の狭い稜線上にわずかしか存在せず、教育活用や多くの来訪者の利用に対応しうる広さの確保のためには、地形の造成やデッキなどの構造物の設置を含めた検討を必要とする。




（図　Ⅱ－３－13　周辺の地形条件）

**■石室保護施設との園地の関係**

不特定多数の利用が想定される石室保護施設には、その導入部に対し、集団行動が可能な広さの確保、危険な急斜面からの隔離、ハートビル法への対応など活用面と共に、石室内環境に影響を及ぼす海風からの保護、第２石室の保護など保存面、さらに異常多雨や地震、想定外の事態に対応できることが求められる。

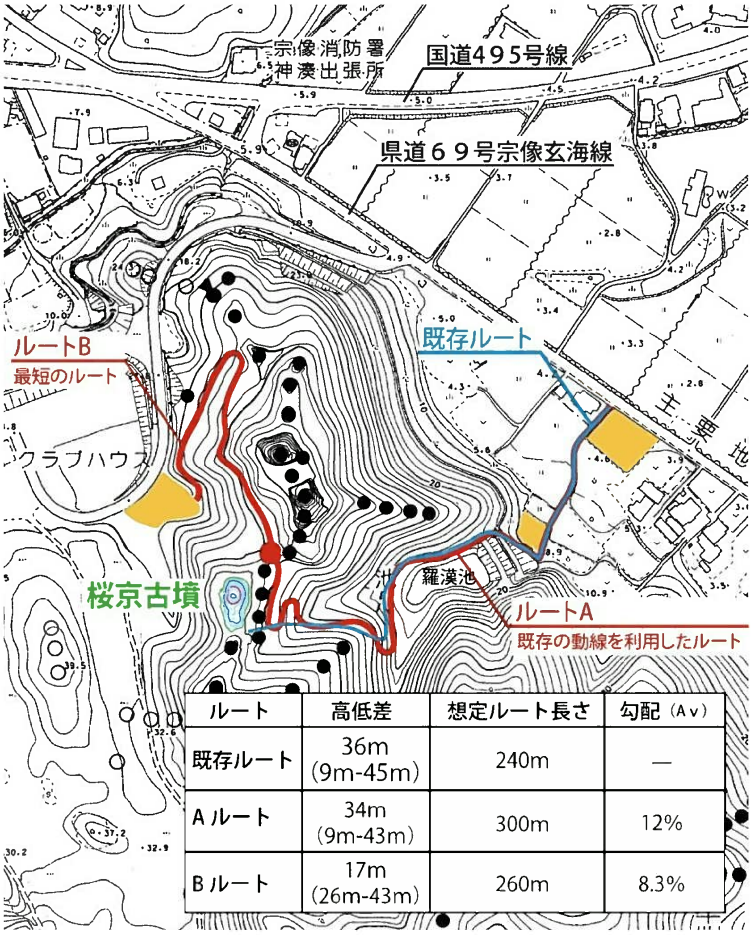
施設の床高さに関しては、石室より低く、接続する地盤面よりも高く設定し、浸水などの事態に対しても対応可能な状況を必要とする。さらに中心となる園地からの勾配検討など、バリアフリーへの対応が求められる。

以上のことから、石室保護施設の開口方向は、中心となる園地に向けられ、海風を避けるため東向きに設定されることが望ましいと考えられる。

■史跡へ至るルート

桜京古墳は丘陵の狭い稜線上に立地するため、教育活用など、多くの人数を対象とした園路整備には制約が課せられる。史跡に至るルート概略の検討を行い、右図のような２ルートが考えられた。

県道６９号線から史跡に向かう既存の登山ルートは羅漢池の堤下の位置から240mほどで34mを登る急勾配な登山道である。多少のルートの延長を行い平均勾配 12%程度まで緩やかにすることができるが、バリアフリーへの対応は困難である。



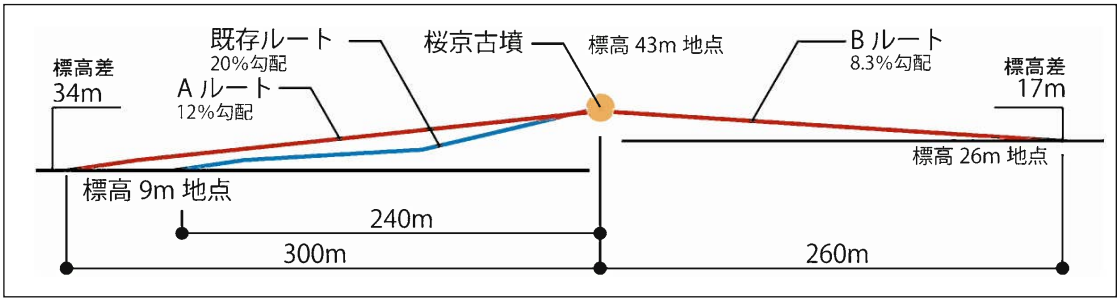

| ルート | 高低差 | 想定ルート長さ | 勾配（Av） |
|---|---|---|---|
| 既存ルート | 36m (9m-45m) | 240m | — |
| A ルート | 34m (9m-43m) | 300m | 12% |
| B ルート | 17m (26m-43m) | 260m | 8.3% |

（図　Ⅱ－3－14　史跡へのルート検討図）

西側のゴルフ場構内道路の最も標高差の少ない地点からのルート（ルートB）を検討した場合にはバリアフリーへの対応は可能であるが、民有地で利用中の構内道路の使用には問題点が多く残る。

いずれのルートにしても勾配を緩くするためには造成量が多くなり、造成時による森林の保護には十分に配慮した計画としなければならない。また、ルートの到達点としては周辺円墳が確認されていない、桜京古墳群とスイラ古墳群の中間地点、桜京古墳の北西側稜線上が適していると考えられる。

前述したバリアフリーへの対応については、頂部への車道の確保とともに、頂部付近に身体障害者用の駐車場を設置するなどの検討が必要となる。




（図　Ⅱ－3－15　ルート勾配による勾配の比較）

# ４　周辺環境及び史跡の特性と評価

これまで調査、検討してきた桜京古墳を取り巻く自然環境や社会環境、桜京古墳の歴史的評価や壁画と石室環境の状況等を踏まえ、下記に本整備に係る特性と評価をまとめる。

## １）周辺環境の特性と評価

### ア）自然環境についての特性と評価

・桜京古墳は沿岸部の市境付近に位置し、福津市と宗像市両方面を望む位置にある。優美な海岸線や松原、河川など変化に富んだ自然景観を生かした整備が望まれる。

地形（P. 16）

・周辺の森林は戦後に形成された二次林である。竹林の浸潤などで荒廃しており、再生整備と継続的管理を必要としている。市民参加による森林再生につなげることが期待される。

周辺森林の状況（P. 20）

・立地する山塊は岩類により構成されており、大規模な掘削を伴う造成には向かない。

地質（P. 18）

（写真　Ⅱ－17　既存の登山道）

（写真　Ⅱ－18　盤が岩類と推測できる樹木の板根部）

### イ）社会環境についての特性と評価

・桜京古墳の潜在的景観として、西に玄界灘、東に釣川方面を望むことができるとともに、「道の駅むなかた」など集客施設からも認識できる。森林を整備することで古墳からの眺望を確保し、周辺地域から遠望、認識されることで来訪者増につながる。

景観（P. 26）

・近隣の玄海小学校からは、徒歩 10 分足らずで桜京古墳の登山口にいたることができる。学校教育と連携した歴史・自然学習の場として活用するのに便利な位置にある。

周辺状況（P. 6）

・全国同様、宗像市でも急激な高齢化を迎えており、高齢者の活躍の場が求められている。森林再生や各種イベントなど市民参加型の活用展開を進める必要がある。

人口（P. 21）

・県道 69 号線が古墳の東側を通っており、公共交通機関には民間路線バスや市コミュニティバスがあるが、最寄りの「神湊入口」バス停でも 800mほど離れており、自家用車利用が大半と考えられる。活用促進には駐車場整備が必要である。

**交通（P. 22）**

・年間 139 万人が利用する「道の駅むなかた」や年間 200 万人ほどが訪れる「宗像大社」、平成 24 年度オープンの歴史拠点施設「郷土文化学習交流館」が周辺にあり、史跡が整備されれば、一定の来訪者数の確保が期待できる。各施設と連携した活用促進が必要である。

**観光（P. 24）、郷土文化交流学習施設（P. 10）**

・桜京古墳へ向かう里道は森林を通るため、猪や蜂などの獣虫害に注意しなければならない。また、隣接する羅漢池は変化に富んだ景観を演出するが、夏季には蚊の発生などが懸念される。安全対策とともに、ため池管理者と連携した整備が必要とされる。

**周辺の土地利用（P. 29）**

（写真　Ⅱ－19　道の駅むなかた）

（写真　Ⅱ－20　北側の土地利用）

### ウ）関連諸計画を含めた複合的な特性と評価

・園路、サイン、解説板や便益施設、維持管理や緊急時のための管理車道の整備などは、バリアフリーやユニバーサルデザインへの対応が求められる。

**総合計画（P. 7）、総合計画後期（P. 8）、人口（P. 21）**

・ユネスコ世界遺産登録暫定リストに記載された史跡であり、世界遺産登録活動と連携した整備、活用展開や調査研究、広報活動が必要とされる。

**総合計画後期（P. 8）、世界遺産（P. 12）、観光（P. 24）、歴史・観光推進計画（P. 9）**

（写真　Ⅱ－21　コミュニティバス）

（写真　Ⅱ－22　市民ワークショップ）

## ２）史跡の特性と評価

### ア）史跡および周辺地域の歴史的特性と評価

・桜京古墳は玄界灘沿岸部における希少な装飾古墳であり、筑後・肥後地域など装飾古墳の中心地である有明海沿岸部との関わりが指摘されている。また、壁画には宗像海人族の死生感や思想が込められており、確実な保存と継承が本整備の根幹である。

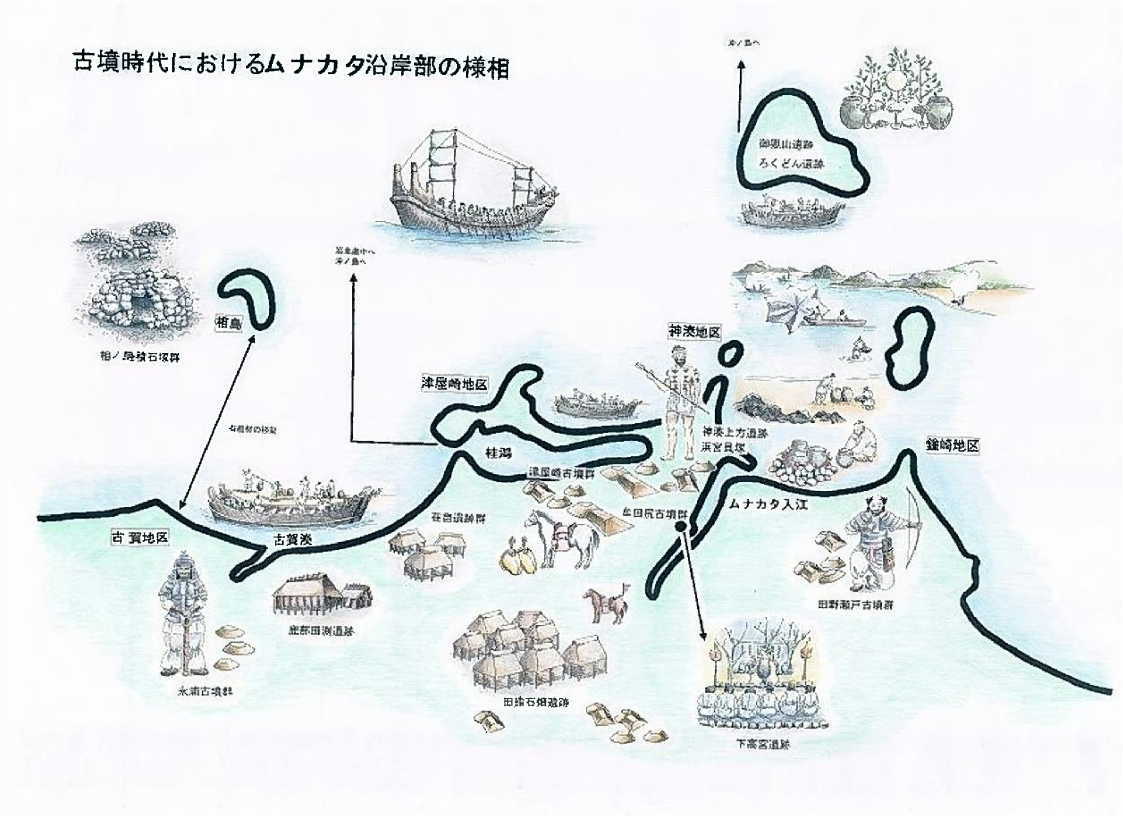
古墳の概要（P. 33）

・周辺に展開する浜宮貝塚など古墳時代における宗像海人族のくらしぶりを知る遺跡群と葬送儀礼にかかわる古墳群などを総体として考えることが必要である。最新の調査研究成果を反映した活用や情報提供に努めることで、遺跡の価値の向上や活用事業の充実した展開が期待される。

周辺遺跡の概要（P. 30）

・桜京古墳を含む牟田尻古墳群は 200 基余りの群集墳であり、首長墓の連なる福津市津屋崎古墳群とは異なる固有の景観を持つ。地方豪族と海人族の支配関係を考える上でモデル的であり、行政区を越えた連携が求められる。

周辺遺跡の概要（P. 31）




（図　Ⅱ－4－1　古墳時代におけるムナカタ沿岸部の様相）

### イ）史跡の保存と公開から見た特性と評価

・墳丘は西側が大きく崩落しており、北西の海風を受ける石室環境の保全のために、また古墳の景観を再現させるためにも復元的整備を行うことが望ましい。墳形や復元盛土の厚さなど復元手法の検討は、墳丘上樹木の管理とあわせ慎重に進めるべきである。

**墳丘の復元（P.36）**

・墳丘上の樹木の緑陰は石室内環境の安定化に貢献しているが、老木や痛んでいるものもあり、強風による根返りで墳丘が損傷する恐れがある。また、枯死した場合は、根の腐食による水みちの発生、墳丘の陥没など様々な面で古墳全体に悪影響を及ぼす。そのため断幹や切り詰めなどで根の発育を押さえるなど管理手法を検討し、適切に対応する必要がある。

**墳丘上の樹木（P.37）**

・現状の墳丘は樹木が覆い茂るため、下層植生に乏しい。整備後は直接の風雨にさらされる事による表土の流出や太陽光が照射する事による石室内の温湿度環境への影響が懸念される。墳丘の保護と石室内への影響を低減させる為に、墳丘表面の地被類による保護などの対応は、墳丘の表現とともに検討を要する。

**墳丘上の樹木（P.36）**

・石室保護施設を建設する場合、設置箇所の遺構分布の有無が問題となる。平成 15～17 年度にかけて実施したトレンチ調査の結果から削平深度を検討し、遺構の存在する可能性は低いものと考えられることから、現状変更の検討が可能である。

**墓道前面の遺構分布（P.38）**

・石室開口部は、長らく土のう積みによる仮密閉であったが、調査の結果、石室環境は比較的安定しており、石室開口部に適切な保護施設を設置することで環境調査、管理性が向上し、壁画の保存状況に応じた一般公開を行うことが可能である。

**石室の内部環境（P.39）**

・史跡に隣接する 5 基の円墳は、桜京古墳との関連性が考えられる。今後調査を進め、将来的な一体的整備を検討する必要がある。

**周辺の地形条件と課題（P.40）**

### ウ）周辺地形から見た特性と評価

・墳丘周辺は急な斜面が多くまた円墳が点在する。不特定多数の利用を想定した園地の位置は墳丘北東部の稜線上がルートの到達点としても適している。

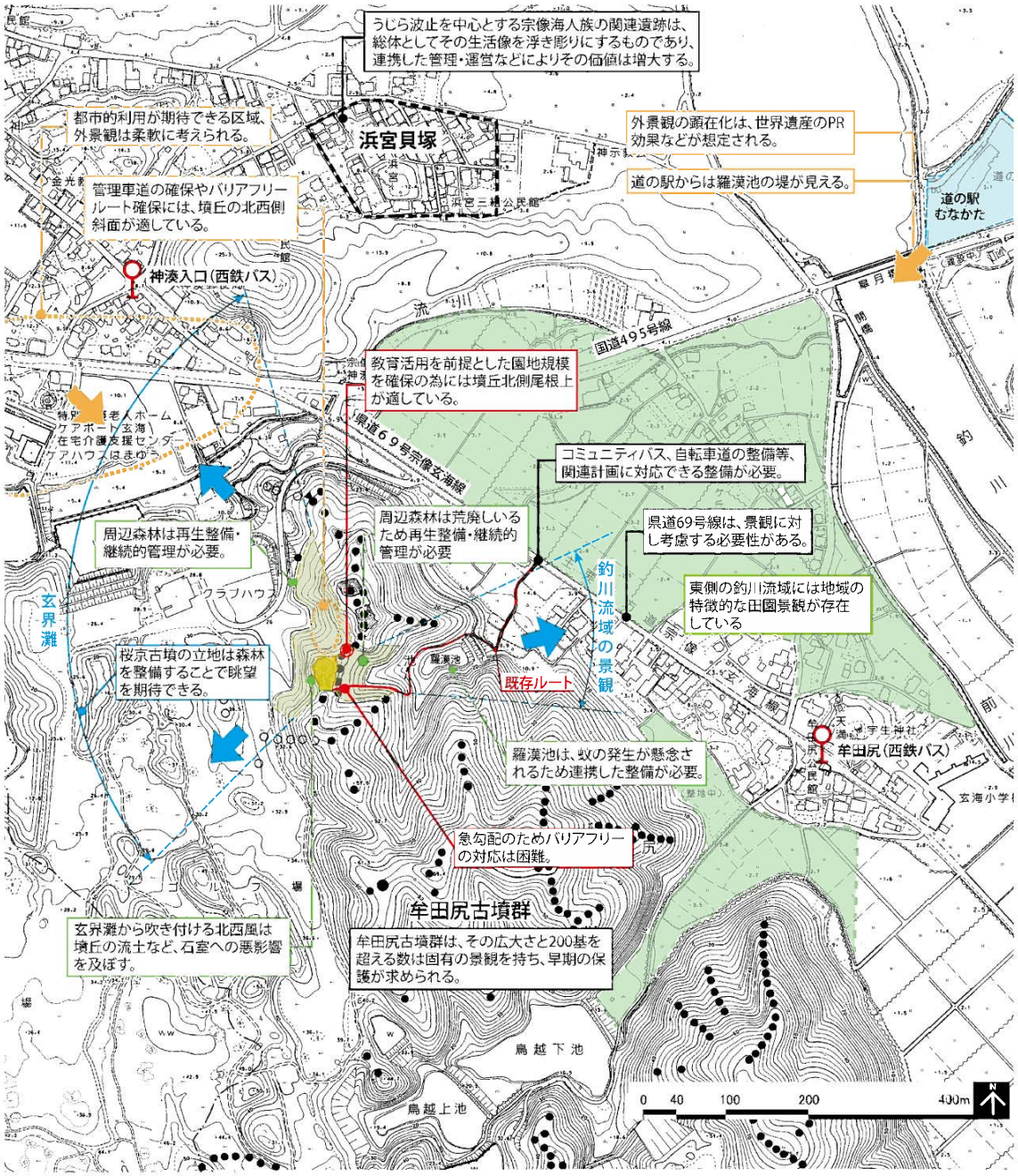
**園地の確保（P.38）、史跡へ至るルート（P.41）**

・墳丘へ至る既存のルート(A ルート)は急勾配の為バリアフリーへの対応は困難である。

**史跡へ至るルート（P.41）**

・西側から墳丘に至るルート(B ルート)の新設はバリアフリーへの対応は可能であるが、ゴルフ場 構内道路の利用や、森林の保護の面で早期の実現には課題がある。

**史跡へ至るルート（P.41）**


うじら波止を中心とする宗像海人族の関連遺跡は、総体としてその生活像を浮き彫りにするものであり、連携した管理・運営などによりその価値は増大する。
都市的利用が期待できる区域、外景観は柔軟に考えられる。
浜宮貝塚
外景観の顕在化は、世界遺産のPR効果などが想定される。
道の駅からは羅漢池の堤が見える。
管理車道の確保やバリアフリールート確保には、墳丘の北西側斜面が適している。
道の駅むなかた
神湊入口（西鉄バス）
国道495号線
教育活用を前提とした園地規模を確保の為には墳丘北側尾根上が適している。
県道69号宗像玄海線
コミュニティバス、自転車道の整備等、関連計画に対応できる整備が必要。
周辺森林は荒廃しているため再生整備・継続的管理が必要
県道69号線は、景観に対し考慮する必要性がある。
周辺森林は再生整備・継続的管理が必要。
玄界灘
釣川流域の景観
東側の釣川流域には地域の特徴的な田園景観が存在している
桜京古墳の立地は森林を整備することで眺望を期待できる。
羅漢池
既存ルート
羅漢池は、蚊の発生が懸念されるため連携した整備が必要。
牟田尻（西鉄バス）
急勾配のためバリアフリーの対応は困難。
牟田尻古墳群
玄界灘から吹き付ける北西風は墳丘の流土など、石室への悪影響を及ぼす。
牟田尻古墳群は、その広大さと200基を超える数は固有の景観を持ち、早期の保護が求められる。
烏越下池
烏越上池
0 40 100 200 400m

（図　Ⅱ－4－2　特性と評価）